

和歌（万葉・古今・新古今）確認テスト 解答・解説

■ 解答・解説

問1 (1) 訳例＝「田子の浦を通過して、（眺めの開けた所へ）出て見ると、真っ白に、富士の高い峰に雪が降っていることだなあ。」 (2) 本問の本文（『万葉集』の形）は「降りける」、『新古今』『百人一首』の形は「降りつつ」。（『万葉集』は今まさに降り積もった結果を「降りける」と詠嘆し、後世の形は降り続く様子を「降りつつ」と詠む。）

問2 訳例＝「銀も金も宝石も、何になるろうか（いや、何にもならない）。（それらに）まさる宝が、子に及ぼうか、いや及びはしない（＝子にまさる宝はない）。（「何せむに」＝どうしようか・何になるろうか。「しかめやも」＝及ぼうか、いや及ばない、の反語。）

問3 「貧窮問答歌」（ひんきゅうもんどうか）。山上憶良が貧者と窮者の問答の形で当時の庶民の苦しい生活を詠んだ長歌。

問4 「かぎろひ」とは、明け方に東の空にさす光（曙光・あけぼのの光）のこと。ここでは夜明けの光が立ちのぼるさまをいう。

問5 (1) 「光」（「ひさかたの」は「光」を導く枕詞。広く「天・空・日・月・光」などにかかる）。(2) 枕詞とは、特定の語の上に置いて語調を整え、ある一定の語を導き出す、ふつう五音（多くは五音）の修飾的な語句。原則として現代語には訳さない。

問6 訳例＝「（こんなにもどかな春の日に、）落ち着いた心もなく、どうして花は散っているのだろう。」（「らむ」は現在の事態の原因・理由を推量する現在推量で、「どうして～ているのだろう」と訳す。）

問7 係りの助詞＝「ぞ」。結び＝「ける」（過去・詠嘆の助動詞「けり」の連体形）。係助詞「ぞ」を受けて、文末が連体形「ける」で結ばれている（係り結び）。

問8 訳例＝「人は、さあ、（その）心はわからない（＝昔のままかどうかわからない）。（「いさ」＝さあ（どうだか）、の意で、下に打消や不確実な表現を伴う。）

問9 小野小町（おののこまち）。六歌仙・三十六歌仙の一人で、『古今和歌集』を代表する女流歌人。

問10 訳例＝「夢だと知っていたならば、（そのまま）目を覚まさなかったであろうに。」（「せば…まし」は事実に反することを仮定する反実仮想で、「もし～だったら…だろうに」と訳す。）

問11 (1) 体言止め（たいげんどめ）。(2) 三夕の歌（さんせきのうた）。西行「心なき…」・寂蓮「寂しさは…」・定家「見渡せば…」の、結句が「秋の夕暮れ」で結ばれる三首をいう。

問12 訳例＝「（出家して）ものの情趣を解さないはずのこの身にも、しみじみとした情趣は自然と感じられることだなあ。」（「心なき身」＝風流を解さない（はずの）我が身。出家者である自分をいう。「あはれ」＝しみじみとした情趣。）

問13 三句切れ。第三句「知られけり」の「けり」（詠嘆）で意味がいったん切れ、そこで詠嘆が完結しているため。（前半で感動を述べ、後半「鳴立つ沢の秋の夕暮れ」で体言止めにより情景を提示する構成。）

問14 『源氏物語』。最終巻（第五十四帖）の巻名「夢浮橋（ゆめのうきはし）」を踏まえている。

問15 『万葉集』（まんようしゅう）。①山部赤人・②山上憶良・③柿本人麻呂は、いずれも『万葉集』を代表する歌人である。

問16 『古今和歌集』（こきんわかしゅう）。編者は紀貫之・紀友則・凡河内躬恒・壬生忠岑の四人で、このうち一人を挙げればよい（中心人物は紀貫之）。

問17 『新古今和歌集』（しんこきんわかしゅう）。

問18 イ（ますらをぶり）。『万葉集』の男性的で力強く素朴な歌風をいう。江戸時代の国学者賀茂真淵が唱えた語。

問19 たをやめぶり（手弱女振り）。『古今和歌集』以降の、女性的で優美・繊細な歌風をいう。

問20 ウ（幽玄）。『新古今和歌集』の理想とした、言葉に表れない奥深い情趣・余情の美をいう。

問21 本歌取り（ほんかどり）。有名な古歌（本歌）の語句や趣向を意図的に取り入れて作歌し、もとの歌の余情を重ね合わせて新たな情趣を生み出す技法。

問22 ア＝『万葉集』 イ＝『古今和歌集』 ウ＝『新古今和歌集』。

問23 『万葉集』 → 『古今和歌集』 → 『新古今和歌集』（奈良時代 → 平安時代前期 → 鎌倉時代前期の順）。

問24 仮名序（かなじょ）。紀貫之が仮名で書いた『古今和歌集』の序文で、「やまと歌は、人の心を種として…」で始まる。（漢文で書かれた紀淑望の序は「真名序」という。）
